10　阿耶阿耶躊々

昔、ある山村に、よいお爺さんとお婆さんがあった。その隣には、悪いお爺さんとお婆さんがいた。

よいお爺さんは、山の木こりが得意で、年中木こりで暮らしていた。

隣のお爺さんは盗みが大好きで、雨が降れば寝てばかりいて暮らした。

よいお爺さんは、隣のお爺さんに、ときどき物を盗まれると、お婆さんが、とてもおこるが、お爺さんは「ナニ、またか、困った人だな、いやおこるな、盗まれたっていいさ、おれは木こりが楽しみだ」といって、あきれさせるが、いつもニコニコしている。

ところが、このよいお爺さんに、一つの癖があった。それは、ところかまわず発するオナラである。

しかし、そのオナラは臭くないのである。ポンとならすときのお爺さんの顔はとても明るい。どうもこれもお爺さんの楽しみらしい。

この村に、沢山の田畑や広い山をもっている長者がいた。山には山番人をときどき見まわらせるが、杉やその他の特別な木のほかの雑木は、村人にただでくれた。そのかわり、長者のご用とあれば、いつでもすぐ行かなければならないのであった。

よいお爺さんは、今日も山の奥で、薪を切っていた。山にはまだあちこちに雪が消え残っているが、マンサクやコブシの花が咲き、小鳥がさえずって、もう春だ。

ところが、どこからか、大声で叫ぶ音がする。「おーい、誰だ」と、なんども叫んで近づいてくるようである。

お爺さんは「ハーイ、山々のヘッピリじいでござーる」と答えると、また声がして「さらば、ござサ来てへーひれー」といわれて、お爺さんは、早速声のする方におりていった。

そこには、こわい顔の大男がいたが、見覚えのない人である。新しく雇われた山番人であろう。「お前は、山々のヘッピリじいか、そんなら、いますぐヒッテミロ」とせきたてた。

おじいさんはかしこまって、少し腰を曲げて「あやあや、ちゅうちゅう、錦、さらさら、五葉の松原、トッピンパラリンの…」と口でとなえると、お尻がポンと音を発した。

大男は、「アッハハ、ウン面白い！サテもよい屁だ、もう一つ」というのである。お爺さんは、大男にせがまれるままに、前と同じ文句で三発も放った。

これはとても他人には、真似の出来ない芸当である。大男は感心して、顔をほこらばせながら「おれについてこい、長者どののご用だ」というのである。お爺さんは、山道具を荷俵にしまい、それを背負ったまま、おそるおそる大男のあとについて行った。

長者の家には、家族と召使いの男女や、その日の雇い人らが大勢いて、酒もりが開かれていた。その座敷の中にお爺さんが呼び入れられて、お膳を出された。自分はなにも不調法をした覚えはないが、長者どのに何か叱られるのだろうと思って、箸もとらないで固くなっていると「飲めよ、飲めよ」としきりにすすめられて、好きなお酒を飲むと、しだいに楽しくなってきた。

そしたら大男は「じい、さっきのトッピンパラリンをやれ」というのである。お爺さんは少しテレたが、ナニ、おやすいことだと、度胸がすわってきた。お酒をのんで、美味しいご馳走をいただいているので、お腹の調子もよい。早速、山でやった通り「あやあや、ちゅうちゅう……ポンポン」をはじめた。唱え文句が第一長者どのの気に入り、ポンポンの音は鼓の音そっくりだと、みなの衆が感心して、もう一つもう一つと、何遍もせがんだ。

お爺さんは、楽しくてたまらず、こんどはみなの衆の唄にあわせて踊ったり、ならしたりして、人気ものになり、中には「お爺さん、おれにその秘伝を教えろ」とせがむものもあるが、「いやいや、これは生れつきの芸当で、他人さまに教える方法はないのでござります」といってご免こうむった。

お爺さんは時のたつのも忘れていたが、お婆さんを思い出して、長者どのとみんなに、不調法のご挨拶をしていると、長者どのからご褒美に、お銭や婆さんの着物など沢山のお土産を下された。

お爺さんは、ありがた涙を流しながら、それを頂戴して山道具とともに背負い、ポンポンならしながら家に帰った。

お婆さんは、大変心配して待っていたが、いまお爺さんからわけを聞くと「お爺さん、芸は身を助けるといわれるが、本当だなァ」といって二人で喜んだ。

あくる朝、隣のお婆さんが火だねを貰いに来た。そして台所を見ると、これまで見たことのない着物などがたくさん広げられてあるのに驚いた。

ところが、その事情を聞くと、矢も盾もたまらず、わが家に駈け戻って、家にいたお爺さんに小豆めしをたくさん強いて食わせた。そして「なんぼ、たいぎでも、今日は長者どのの雑木山に行って木を伐れ、そしたら山番人がまわってきて屁をひれというだろうから、そのときは、ありったけがんばって、ひれよ。そしてご褒美をどっさり貰って来いよ。背負い切れないかも知れないから、いい時分になれば、おれが迎えに行くから」といって、せかしたてられて、そのお爺さんは、山の奥の雑木山は、たいぎなので、長者の広い屋敷の奥に立ち並ぶ大木にガンガン、ドンドンとマサカリをぶっつけて、わざと大きな音をたてた。ところがやはり、山番の声がかかった。「オーイ、山々のヘッピリじい、今日も来たか。だが、そこの木は伐るな、まず早くここに来て、またあれをやれよ」というので、隣のお爺さんは、急いで行って山番の大男の前にかしこまった。すると大男は「なんだお前は別のじいだな、お前もあやあや、ちゅうちゅうが上手か、さらば、いますぐやってみろ」というので、その爺さんはハイといって腰をかがめたが、よいお爺さんのような「あやあや」の名文句もなにも知らないので、顔をまっ赤にして、ただウンウンとありったけ力んだところ、ポンのよい音が一つも出ないで、不調法な奴が一ばい出て大変なそそうをしてしまった。

番人の大男は、おこるまいことか「この野郎悪い野郎だ。懲らしめてやるッ」といって、トゲだらけのバラの棒切れで、その尻をズバッ、ズバッと打ったからたまらんだ。そして爺が倒れて泣き出すと「さあ懲りたか、懲りたら早く帰れッ」と、おどしつけられた。

そのお婆さんが、待ちきれなくて途中まで迎えに出ると、お爺さんの声がするので、宝ものなどを、どっさり背負って唄がけで来ただろうと思って走り寄って見たところ、何も背負わないばかりか、びっこを引いて泣いてきたので、お婆さんは、がっかり力を落し、二人が泣きながら、漸くわがあばら家にもどった。二人とも何もいわないで、ただ頭をさげ、心の中で、あとくやみするのであった。これきてトッピンパラリン。